

# 継承

古来から地域に根付く伝統神事

神楽は古来から、農村に生きる人々の手によって、連綿と受け継がれてきた大切な神事。現代へとつながる「伝統」の連鎖です。そのルーツを紐解きます。

## 神楽の起源・天岩戸伝説

神楽とは、神座に神を迎え、神の力を招き鎮めることで、生命力を高めようとする儀式のこと。神と人とが共に打ち解け、快楽を味わうことで、神の力を得ようとする神事を神楽と呼びます。

その起源は、紀記説話の「天岩戸伝説」の話にさかのぼるといわれています。天岩戸伝説とは、太陽の女神天照大神が、天の岩戸の中にこもってしまったとき、これを引き出すべく天鈿女命が岩戸の前で乱舞しました。その滑稽な姿に、外の神々は大騒ぎに。不審に思った天照大神が、岩戸をそとと開けたところを、ここぞとばかりに手力男神が岩戸をこじあげ、天照大神を連れ出したという有名な神話です。この天鈿女命の乱舞こそ



### 駿河神楽の分布

駿河神楽は、井川と安倍川本流山間部に分布する「安倍・井川型」と、藁科川流域山間部と大井川流域左岸地域に分布する「藁科・川根型」に分類される。出ばやしなどの音曲構成や、湯立のかまどの構造、湯伏せの呪術などに異なる点がある。

が、神楽の起源だといわれています。一年のうちで最も太陽の力が弱まる時期に、その太陽の再来を願って神を招き、生命力の強化を祈願した鎮魂の儀式が、その起源といわれています。

### 駿河神楽は生活の支え

駿河神楽の分布域は、安倍川と大井川流域の左岸地域。西駿河山間部に集中して伝承されている神楽を「駿河神楽」と総称し、現在も50方以上で受け継がれています。駿河神楽は奥三河の花祭りや、長野県下伊那郡に伝承される霜月祭りなどにつながる湯立神楽の一つで、伊勢流神楽に分類されるといわれています。本町梅地の神職を長く務めた筑地家には、「神うた神道行

事祓」が伝わり、この最後に「五穀成就猪鹿退散村内はんじょう祈念可致もの也」と書かれています。五穀豊穰は、農村の祭りが持つ共通のテーマですが、猪鹿退散という文面は、焼畑農業に依存する農村地帯には切実な願いでした。農作物の収穫時期になると、家族総出で小屋に泊まり込み、夜中に交代で声を出して獣を追い払うことも多かったようです。しかしちよつとした油断から、鹿に粟を食べ尽くされてしまったとか、里芋をこつそり掘り返されてしまったという話は多く、ほうぼうに伝わっています。

駿河神楽はそんな焼畑農業に食料を依存する山間部の人々にとって、暮らしの支えとして伝承されてきた大切な文化なのです。

### 神楽は共同社会の基礎

神楽は、農作物の収穫期に併せた自然や神に対する感謝の祭りです。と同時に、人々にとつては年に一度の晴れの舞台でもありました。一年の苦勞から開放されて、共に生きる喜びをわかちあう祭りでもあったのです。また、氏神社を中心に神楽団を組み、神楽を舞う形態は、その集団内の連帯と共同意識を高める役割も担っていました。神楽は、人間らしい助け合いを可能にする「共同社会」の基礎を形づくってきたといえるのです。

## 梅津神楽

うめづ

かぐら

接叡地区で、約50年前から続く神事が梅津神楽です。梅地のこだま石神社と、犬間の若宮神社の祭典の前夜祭に奉納されます。1956(昭和31)年から、両神社で隔年交互に奉納するようになりました。1972年には、県無形民俗文化財の指定を受けています。

1467(応仁元)年の応仁の乱で、京都梅津地区(現右京区)の里に住んでいた筑地氏が一族を率いて都落ちし、信州を経て梅津地区に村を開きました。筑地氏はこの地を梅津(のちに梅地)と名付け、氏神を勧請して自ら神主となり、社前で奉納したのが梅津神楽の始まりとされています。奉納に当たって神楽式があり、湯立て行事が執り行われます。夕方から「幣の舞」「三宝の舞」「梅津流太刀の舞」「天王の舞」「八幡の舞」「鬼の舞」など16の演目が厳粛に、時にユーモラスに奉納されます。奉納はこれまで、両神社の氏子らが一年交代で演じてきましたが、過疎・高齢化により氏子の数が減り、近年では、梅津神楽保存会が中心



となつて、毎年一月に奉納しています。若い後継者の育成を目的として、地元児童も参加し、神楽の伝承に努めています。

## 田代神楽

たしろ

かぐら

創始年代は明らかではありませんが、言い伝えによると1189(文治5)年、成元成善・成近の兄弟がこの地に村を開き、大井川河畔の杉の根元に大井神社を建立。成善が神職につき、神楽を奉納したと伝えられています。田代神楽を奉納するこの大井神社は、弥都波能売神をまつています。創建された年代は不明ながら、一番古い棟札には1678(延宝6)年の記述があり、1985年には、県無形民俗文化財の指定を受けました。田代神楽は「農祭」と、3年に一度、坂京↓田代↓崎平の順に奉納する「ミサキ神楽」で混成されています。「ミサキ神楽」は大井川・安倍川流域山間部に広く分布する湯立神楽の一つ。悪病退散、願望成就を祈る神事です。

神楽では、本殿の正面参道に炬を切つて大釜を据えて湯を煮えたらせませます。笛・太鼓・銅拍子にあわせ、白装束姿の巫女が神懸りして「御幣舞」などを舞います。釜の中に洗米・酒・塩を注ぐと湯煙が立ちこめ、最後に笹の葉を熱湯にひたし



さつと振りかけます。湯にかかれば無病息災のご利益があり、その笹の葉を持ち帰れば幸運に恵まれるといわれています。

## 徳山神楽

とくやま

かぐら

徳山神社の例祭である10月中旬の夜、境内で奉納される古い神事芸能が徳山神楽です。徳山神社の創建は古く、888(仁和4)年とも伝えられ、後に牛頭天王社と改められ、さらに明治3年に徳山神社と改称されました。祭神は建速須佐之男命ほか四柱の神です。徳山神楽は、江戸時代前期に定着し、代々氏子に伝えられてきたものといわれています。神楽歌を記した文書で現存するものも古いものは、1674(延宝2)年のもの。延宝というと四代將軍家綱の時代で、江戸に歌舞伎が確立されたころにあたります。

神楽式は、修祓・降神式から始まり、昇神式まで一貫した儀式がなされ、「神の舞」「倭舞」など16の舞が舞われます。また、刀を手にした「剣の舞」、松明を持ち、笛太鼓に合わせて舞う「火の舞」なども勇壮な舞です。創始は明らかではありませんが、系統の上からは伊勢流の神楽であるといわれています。神楽歌の文書は江戸前期のものが伝わり、当屋制を採用していたことが分かる道



行も伝承されることから、駿河神楽の中でも特筆すべき要素を含むとして、1996年、県指定無形民俗文化財となりました。

参考：榛北地域文化データベース

神座…神体を安置する場所。神霊の降ってくる定まった場所。